

アルストロメリア「ロザリオ」の生育経過について

柴田 浩・水越 洋三・畠山 順三

(秋田県農業試験場)

Growth Process of "Rosario" Alstroemeria

Hiroshi SHIBATA, Yozo MIZUKOSHI and Junzō HATAKEYAMA

(Akita Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

秋田県でのアルストロメリア「ロザリオ」の栽培は、昭和58年から始まり、現在30 a以上の施設で行われているが、元来日本での栽培経歴は極めて浅く、栽培において不明な点が多く、栽培法の確立がいそがれている。このようなことから、本県における適応性を検討し、栽培上の問題点を明らかにする目的で、昭和59年4月に直輸入苗を定植し、植付け当年と2年目の生育状況を追跡調査したので、その結果を報告する。

2 試験方法

(1) 植付け当年(昭和59年)

1)栽培型: 施設・無加温栽培, 2)試験規模: 40株
3)耕種概要: 定植…昭和59年4月12日(直輸入ポット苗)。施肥量(a当たり)…基肥N, P₂O₅, K₂O各3.0 kg, 追肥N, K₂O各0.5 kg(6月6日), 各0.2 kg(7月23日), N, P₂O₅, K₂O各0.5 kg(9月11日)。遮光期間…5月18日～9月20日(黒寒冷紗一重被覆)。敷わら期間…6月6日～9月3日。

全茎葉刈り(茎葉凍結)…12月25日。冬期間敷わら期間…12月25日～昭和60年4月8日。

(2) 植付け2年目(昭和60年)

1)越冬条件: A…加温(0～3℃, 昭和60年1月6日～3月20日・温床線空中配線及びビニールトンネル被覆)。B…無加温

2)試験規模: A…加温12株, B…無加温12株

3)耕種概要: 敷わら期間…5月17日～9月3日。遮光期間…5月17日～9月20日(黒寒冷紗一重被覆)。追肥(a当たり)…N, P₂O₅, K₂O(各1.0 kg 4月8日), (各0.5 kg 5月17日, 9月20日)。

3 結果及び考察

(1) 植付け当年(昭和59年)

1) シュート発生状況

月別の発生シュート数は、定植時(4月)1～2本であったが、定植後間もなく新シュートが発生し、5月中には株当たり5本程度の発生、その後徐々に増加し、10月には株当たり17本発生しピークとなり、その後減少した。12月末までの株当たり発生シュート数累計は約80本であった

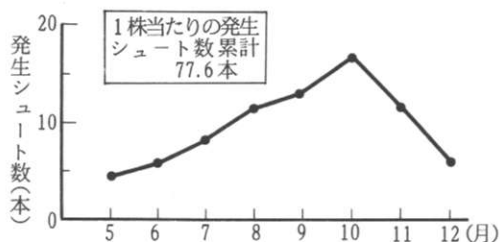


図1 1株当たりの月別発生シュート数

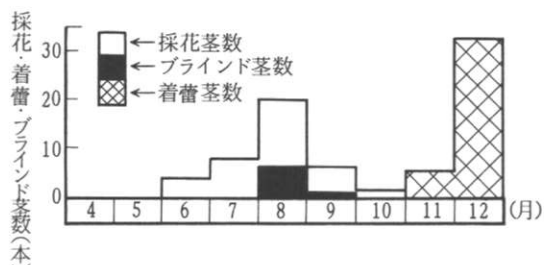


図2 10株当たりの月別採花・着蕾・ブラインド茎数

(図1)。

2) 採花着蕾状況(図2)

採花は6月から始まり、その後徐々に採花数が増え、8月中には10株当たり約20本で採花ピークとなり、その後減少した。採花期間は6月から10月までであった。12月末までの10株当たりの採花茎数累計は約40本で、発生シュート数に対する採花茎数の割合は5%程度と極めて低かった。

11, 12月には着蕾茎が多くみられ、12月末までは10株当たり約30本も確認できたが、無加温栽培のため凍結を受け、開花まで至らなかった。

ブラインド茎は、8月の高温期に集中して発生し、8月の採花茎20本中、約7本がブラインド茎であった。

3) 収穫物調査

収穫物は、採花時期の遅い物ほど切花長、花蕾数等大きい値を示した(表1)。

(2) 植付け2年目(昭和60年)

1) シュート発生状況

加温・無加温区とも3月からシュートの発生がみられ、5月に1回目の発生ピークとなり、その後減少し7～8月

頃から再び増加し始め、10～11月に2回目のピークとなった。11月末までの株当たり発生シュート数累計は、加温区で約172本、無加温区で122本であった(図3)。

2)採花・着蕾状況

採花期間は、加温区で4月から10月、無加温区では5月から10月であった。また、採花のピークは両区とも7月であったが、加温区では6～7月に集中し、無加温区では7～8月に集中した(図4)。

表1 収穫物調査結果(昭59)

項目 採花月	切花長 (cm)	茎 長 (cm)	花枝数 (本)	花蕾数 (花)	切花重 (g)
6月	20.1	9.2	2.2	3.6	12.3
7月	40.3	29.1	3.2	5.6	31.3
8月	54.3	45.2	3.7	6.7	45.8
9月	52.2	42.8	3.1	6.9	48.8
10月	74.6	58.5	2.6	8.2	65.4

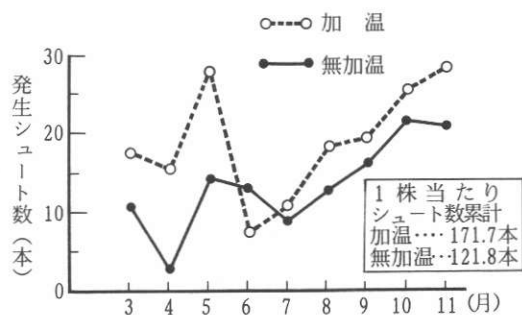


図3 1株当たりの月別発生シュート数

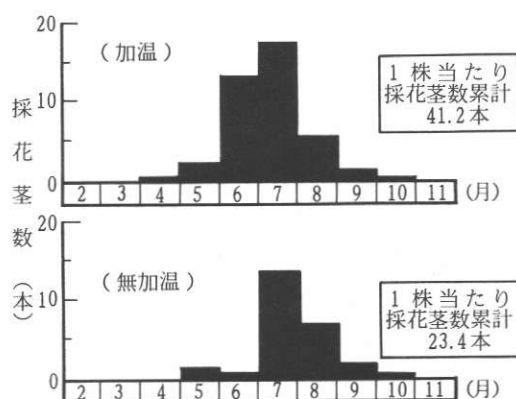


図4 1株当たりの月別採花茎数

11月末までの株当たり着蕾茎数累計は、加温区で約54本、無加温区で約32本であったが、極細小着蕾茎は間引いたので、株当たりの採花茎数累計は加温区で約41本、無加温区で23本となった。

3)収穫物調査

5月中の収穫物は、切花長が約30cm程度と極端に短く、奇形花が採花本数中約4～6割もみられた。6～7月中の収穫物は、切花長が60～75cm程度で品質は良かった。8～9月中の収穫物は、切花長が50～60cm程度と6～7月中の収穫物より短く、また、ブラインド茎の発生が多かった(表2)。全採花茎中の奇形・ブラインド茎率は、加温区で約10%、無加温区で約17%であった(表3)。

切花長別採花割合では、71cm以上の物が加温区で約49%、無加温区で23%であった(表3)。

表2 収穫物調査(昭60)

項目 月区		切花 長 (cm)	花 蕾 数 (花)	節 数 (節)	切花 重 (g)	月別採花本数中の 不良茎割合 (%)		
						ブラインド 茎 率	奇 形 花 茎 率	合計
5月	A	33.6	6.1	26.1	32.7	2.8	36.1	38.9
	B	26.8	4.8	28.2	24.8	7.7	53.9	61.6
6月	A	70.4	8.8	23.2	43.2	0	3.7	3.7
	B	60.6	9.6	20.8	42.2	0	16.7	16.7
7月	A	74.6	10.1	20.7	43.3	0.9	4.6	5.5
	B	67.5	8.6	22.5	41.3	3.9	3.9	7.8
8月	A	51.1	7.4	21.6	39.1	10.1	4.3	14.4
	B	59.5	7.5	23.5	35.1	20.9	1.2	22.1
9月	A	54.7	8.3	26.4	44.2	28.0	4.0	32.0
	B	45.2	7.5	25.3	36.5	10.0	0	10.0

表3 切花長別採花茎割合(昭60)

(%)

区	ブラインド・奇形花茎率	切花長別採花茎割合				
		60 cm以下	61～70 cm	71～80 cm	81～90 cm	90 cm以上
A	9.9	21.1	29.6	31.6	15.5	2.2
B	16.7	36.0	40.8	18.8	4.4	0

4 要 約

植付け当年は、株当たり発生シュート数約80本、採花茎4本程度と極めて少なく、収穫物も良品は少なかった。

植付け2年目は、株も十分充実し、株当たり発生シュート数120～170本、採花茎数20～40本と植付け当年よりはるかに多くなった。また、加温することによって採花が1か月程度早まり、採花本数も多くなり、品質もやや向上することが明らかとなった。

以上のことから、今後は冬期間の効率的加温方法、新植(改植)時期と生育・開花の関係、更には、シュートの効果的間引き方法などについて検討し、採花期間の拡大に努める必要があると思われる。